

国語科と特別活動の「話し合い」についての一考察

—「整理」することに着目して—

A consideration of discussion guidance of Japanese language department and special activities

— From the perspective of “organization” —

次世代教育学部教育経営学科

長谷 浩也

HASE, Hironari

Department of Management for Education

Faculty of Education for Future Generations

姫路市立野里小学校

清瀬真太郎

KIYOSE, Shintaro

Himeji city

Nozato Elementary School

西宮市立夙川小学校

曾川 剛志

SOGAWA, Tsuyoshi

Nishinomiya city

Shukugawa Elementary School

Abstract : The aims of this study are to develop a practical teaching plan and to verify its effects, Japanese language department working together with special activities, in the process of “arrangement” of discussion guidance. As a result of this research, it was clarified that in discussion guidance the strategy of “using tables to organize” worked effectively. This strategy was one of the processes of organization acquired by collaborating with Japanese language department.

キーワード : 話し合い, 整理, 国語科と特別活動の連携, 話し合いのプロセス

Keywords : Discussion guidance, Organization, Cooperation between Japanese language department and special activities, Process of discussion guidance

1. 問題の所在と研究の目的

1. はじめに

本研究は、国語科と特別活動における話し合い指導について、「整理」の過程において双方が連携した実践指導プランを開発し、その効果を検証することを目的としている。

学習指導要領（2017）で「主体的・対話的で深い学び」が提唱され、深い学びへと導く対話的な学びの重要性が叫ばれている。対話的な学びの中でも、授業で行われる自己や他者との対話、つまり話し合いにおいては、言葉を主とする性質上、国語科での学びが重要であることは自明のことである。国語科では、対話的な学びの礎となる「話すこと・聞くこと」領域を中心

として様々な話し合いを活用した授業が展開されている。小学校学習指導要領（2017）では、「言語能力の育成を図るため、各学校において必要な言語環境を整えとともに、国語科を要としつつ各教科等の特質に応じて、児童の言語活動を充実すること。」と国語科の重要性と各教科との関係性を明示している。小学校学習指導要領特別活動編（2017）では、他にも各教科との関連が記載されており、特に道徳科、国語科、総合的な学習との連携の必要性にも言及している。しかし、国語科と各教科間の話し合いの連携については、学習指導要領等での連携の重要性は述べられているものの、実践レベルでの有機的な連携が図られているとは言い難い。特に、特別活動、とりわけ学級活動（1）「学級会」や学級活動（2）の学級内での話し合

いなどの合意形成を目指す話し合いを主とする活動は、話し合いを手段として用いることから、国語科と密接に関わり合うものである^{註1}。

2. 問題の所在と課題

特別活動の話し合いを主とする活動は、話し合いを手段として用いることから、話し合いそのものを対象として言葉の力をつける国語科との関わりが多い。小学校学習指導要領特別活動編（2017）では各教科との関連が指摘されている。また、杉田（2009）は、2008年の学習指導要領の改訂に際するときから「今回の学習指導要領の改訂において、国語科の改善を踏まえ、積極的に関連を図って指導に当たることも大切なこと」と国語科との連携の必要性を指摘している。鈴木（2015）は、「教科書のない特別活動は、学校として育てたい資質・能力について、さらに学年ごとに具体化し、実際の指導方法まで明らかにしておく必要があります。」と述べ、育てるべき資質、能力の系統的な指導法の必要性について指摘している。

実際、小学校教科書に所収されている話し合い指導を目的とする教材のテーマは、特別活動と関係するものが多い（表1）^{註2}。

しかし、特別活動との連携を示唆するような国語科における話し合い教材はあるものの、どのように連携すべきか、また特別活動にどう活かしていくのかを論じた先行研究についてはレビューした限り見当たらなかった。特別活動では、特別活動指導資料（初版2016、改訂版2019）で、小学校と中学校における話し

合い指導やその具体的な指導法について言及しているが、全ての小中学校教員に配られているわけではなく、その資料を基にした指導が普及しているとは言えない。特に、特別活動の話し合いにおいては、学習指導要領特別活動編（2008）では、話し合いでの目標が「集団決定」となっていたものが、学習指導要領（2017）では、小学校1年生から中学校3年生まで全ての段階において「合意形成」と文言を変えて記載されるようになった。話し合いにおいて「合意形成」を図るためには、系統立てた指導や話し合いの過程（以下、プロセス）を明確にした指導が欠かせない。その中でも、話し合いを「整理」する段階の指導は、特別活動では特段に触れられていない部分であり、国語科が果たすべき役割は大きいと言える。

3. 研究の目的と実施方法

本研究では、話し合いのプロセスにおける「整理」する段階の指導について、国語科と特別活動双方が連携した実践指導プランを開発する。

そのためには、まず、国語科と特別活動での話し合い指導の比較を行い、どのように連携を図っていくことが必要かを明らかにする必要がある。その上で、国語科教材をベースに、特別活動と連携した授業を実施する。実施に際しては、話し合いに関するアンケートや意識調査を行い、国語科と特別活動を連携させて指導することでどのような学びの変化があったのかについても検証した。

調査は、H県内にある公立A小学校4年生（学習者数34名、内訳は男子20名、女子14名）、公立B小学校4年生（学習者数29名、内訳は男子14名、女子15名）の学習者を対象に2021年11月に実施した。授業は、30歳代・40歳代の熟達教員の指導のもと実践を行った。対象学習者のグループ学習経験は、国語科や社会科、総合的な学習の時間において特別な手続きのない自由な話し合いを月に数回行っていた程度である。グループ編成にあたっては、学力・男女比等に可能な限り偏りがないように、学力到達度テストの点数等に配慮し、分析対象グループ間の均質性を担保した。

II. 国語科と特別活動の話し合い指導

1. 国語科と特別活動の話し合い指導の比較

特別活動、学級活動（1）の話し合いについての指導の目安について、特別活動の「各学年段階における指導のめやすの例」でつけるべき力については、国語

表1 小学校教科書教材（話し合い教材）

出版社	学年	教材名	特別活動と関連
M	1	これは、なんででしょう	
	2	そうだんにのってください	
	3	はんで意見をまとめよう	
	4	クラスみんなで決めるには	○
	5	よりよい学校生活のために	○
	6	みんなで楽しくすごすために	○
T	1	なにごと見えるかな	
	2	うれしくなることばをあつめよう	
	3	グループの合い言葉をきめよう	
	4	学校についてしようかみすることを考えよう	○
	5	問題を解決するために話し合おう	○
	6	話し合って考えを深めよう	
K	1	えを見ておぼえなしよう	
	2	「クラスお楽しみ会」をひらこう	
	3	絵文字であらわそう	
	4	新スポーツを考えよう	○
	5	A I とのくらし	
	6	地域が防災について話し合おう	○
G	1	クイズ大会をしよう	
	2	やっごらおももしろいよ	
	3	クラスレクリエーションをしよう	○
	4	安全マップを作って話し合おう	○
	5	よりよい考え力はどっち?	
	6	パネルディスカッションをしよう	

科と密接に関係しており、話し合いに関わる言語能力を育成するためにも教科横断的な双方の連携が欠かせない。では、国語科と特別活動の話し合い指導はどのように連携を図ることができるのであろうか。学習指導要領解説国語編（2017）、学習指導要領解説特別活動編（2017）で挙げられている指導事項の文言をもとに話し合い指導の系統性をキーワードで比較した。（表2）

「合意形成」に関しては、特別活動では、低学年から高学年まで「合意形成」の必要性が明確に述べられている。しかし、国語科では、中学年で「考えをまとめる」、高学年で「考えを広げたりまとめたりする」に留まるなど「合意形成」の文言は出てこない。中学校第3学年「話し合うこと」の指導事項「オ 進行の仕方を工夫したり互いの発言を生かしたりしながら話し合い、合意形成に向けて考えを広げたり深めたりすること。」で、国語科として初めて「合意形成」という言葉が使われている。

このように、国語科と特別活動の「話し合い」指導には、指導事項レベルでの共通点が多く見られる一

表2 国語科・特別活動の話し合うことの指導系統表

		低学年	中学年	高学年
話し合うこと	国語	互いの話に関心を持ち、相手の発言を受けて話をつなぐこと。	目的や進め方を確認し、司会などの役割を果たしながら話し合い、互いの意見の共通点や相違点に着目して、考えをまとめること。	互いの立場や意図を明確にしながら計画的に話し合い、考えを広げたりまとめたりすること。
	特別活動	話し合いの進め方に沿って、自分の意見を発表したり、他者の意見をよく聞いたりして、合意形成して実践することのよさを理解すること。基本的な生活習慣や、約束やきまりを守ることの大切さを理解して行動し、生活をよくするための目標を決めて実践すること。	理由を明確にして考えを伝えたり、自分と異なる意見も受け入れられたりしながら、集団としての目標や活動内容について合意形成を図り、実践すること。自分のよさや役割を自覚し、よく考えて行動するなど節度ある生活を送ること。	相手の思いを受け止めて聞いたり、相手の立場や考え方を理解したりして、多様な意見のよさを積極的に生かして合意形成を図り、実践すること。高い目標をもって粘り強く努力し、自他のよさを伸ばし合うようにすること。

方、指導学年が異なるなど、その関連性や系統性が見えにくいものも含まれている。

2. 特別活動における話し合い指導

特別活動においては、小学校1年から司会を始める。

学習指導要領解説特別活動編（2017）における司会の役割の記述としては、低学年で「教師が司会の役割を受け持つことから始め、少しずつ児童がその役割を担うことができるようにしていく」、中学年で「教師の適切な指導の下に児童が活動計画を作成し、進行等の役割を輪番で受けもち、より多くの児童が司会等の役割を果たすことができるようにする」、高学年で「教師の助言を受けながら、児童自身が活動計画を作成し、話し合いの方法などを工夫して効率的、計画的に運営することができるようにする。」といった話し合いの指導の系統性が見られる（表2）。

特別活動指導資料（2016, 2019）や学習指導要領解説（2017）での話し合い指導については、実際の司会の方法については、指導案の作成方法や話し合いの過程で少し触れてある程度で、その指導過程や必要な言語事項などは、指導者に委ねられている。また、参加者に関しても、低学年で「自分の意見を発表したり、他者の意見をよく聞いたりして合意形成して実践することのよさを理解する」、中学年で「理由を明確にして考えを伝えたり、自分と異なる意見も受け入れられたりしながら、集団としての目標や活動内容について合意形成を図り、実践する」、高学年では「相手の思いを受け止めて聞いたり、相手の立場や考え方を理解したりして、多様な意見のよさを積極的に生かして合意形成を図り、実践する」ことが目標となっている。司会も参加者も、話し合いの流れを手がかりに話し合いを進めていく（図1）。

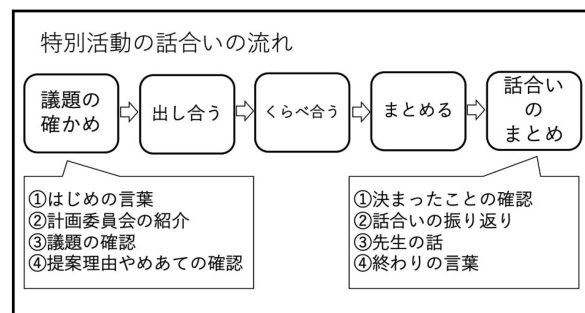


図1 特別活動「学級会」の話し合いの流れ

3. 国語科における話し合い指導

国語科では、学習指導要領において小学校中学年(3・4年)で「オ 目的や進め方を確認し、司会などの役割を果たしながら話し合い、互いの意見の共通点や相違点に着目して、考えをまとめること。」とある。話し合いのプロセスに関しての先行研究では、長谷(2018)で、小学校3年生から中学校3年生に話し合いの理解度について聞き取り調査を実施し、構造的な情報把握(構造)に関する正答率が学年を問わず高くないことを報告している。そして、「話し合い」を理解させる活動として「話し合いを要約する」「メモや表などにしてまとめる」といった指導の必要性を挙げている。

また長谷(2019)においては、小学校国語教科書に所収されている「話し合い」教材の分析から話し合い例には、情報を整理するための表やメモ等の活用を図った発言例は少ないことを報告し、全国学力・学習状況調査(平成19年、21年、26年度)の報告にある「話し合いを整理する力に課題がある」を踏まえ、合意形成のプロセスで展開される「整理」の力を学習者に身に付けさせるための実践プランを提案している。

また、小学校教科書に所収されている「話すこと・聞くこと」領域の教材の中でプロセスが見られる割合は、長谷・重内(2021)によると平成27年度版では約48%だったのに対し、令和2年度版では約83%となっている。令和2年度は、平成27年度の教材と比べて5教材少なくなっているが、プロセスが見られる教材の割合は、約35%増加している。このように、小学校国語科の各検定教科書では、話し合いのプロセスを重視していることがわかる。

長谷・重内(2018)は、中野(2003)、村松(2013)、本間・古閑(2014)、長谷・村松(2015)をもとに「①意見を出し合う、②質問をし合う、③整理、分類する、④結論を出すための視点を考える、

表3 合意形成を目指す話し合いのプロセス

話し合いのプロセス	
1	意見を出し合う
2	質問をし合う
3	整理、分類する
4	結論を出すための視点を考える
5	結論を出すための視点に沿って考える
6	結論を出す

⑤結論を出すための視点に沿って考える、⑥結論を出す」という6つの過程について、合意形成を目指す話し合いのプロセスとして示している(表3)。

本研究では、以上のことより合意形成を目指す話し合いのプロセス、とりわけ国語科と特別活動の話し合いにおける意見を「整理」する指導について、双方が連携した実践指導プランを示す。

Ⅲ. 国語科と特別活動が連携した話し合い実践指導プラン

1. 国語科教科書教材を活用した特別活動、学級活動(1)の実践指導

(1) 授業実践

ここでは、小学校学習指導要領特別活動編(2017)の学級活動の内容(1)「学級や学校における生活づくりへの参画」において、国語科と特別活動とが連携した実践指導プランを提示したい(図2)。

学習の目標を「学級活動での題材をもとに、話し合いでうまくいかなかった意見を比べ合う過程での問題点について話し合い、「整理」する必要性について考える。」としている。特別活動の学級会で児童が実際に話し合った内容をふまえて、意見は多く出たものの、時間内に全員が納得できる整理ができなかった経験を想起させ、意見をまとめるためには、出し合った

(教材)
国語科：光村図書4年下「クラスみんなで決めるには」
特別活動：学級活動(1)「みんなでリレーをしよう」
(目標)
学級活動での題材をもとに、話し合いでうまくいかなかった意見を比べ合う過程での問題点について話し合い、「整理」する必要性について考える。
(学習過程)
①学級会「みんなでリレーをしよう」での比べ合う場面の写真を提示し、話し合いがうまくいかなかった原因を出し合う。
②国語教科書の「記録係が表で整理した例」をもとに意見を整理する方法について話し合う。
③意見を整理する方法についてまとめる。
④特別活動(学級会)の話し合いで実践する。
⑤意見を整理する方法について振り返る(国語科・特別活動、双方向で言語能力を価値づける)。

図2 国語科と特別活動とが連携した実践指導プラン

意見をまずは「整理」する必要があることに気づかせる。国語科の話し合いと特別活動の話し合いでは、話し合いのプロセス単位で見えていくと多くの項目で重なるが、モデル文の内容面について詳しく見ていくと大きな違いがある（表4）。各プロセスで司会や記録、参加者がどのような言葉を用いて話し合いを進めているのかを確認させ、中でも意見を「整理」することの必要性を感じさせる。

表4 実践指導における話し合いのプロセス比較

	国語科	特別活動
1	意見を出し合う	出し合う
2	質問をし合う	比べ合う
3	整理、分類する	
4	結論を出すための視点を考える	
5	結論を出すための視点に沿って考える	
6	結論を出す	まとめる

「整理」する方法については、小学校教科書で示してある意見を表に表して整理する方法について、教科書のモデル文に照らし合わせながら考えさせる（表5）。

表5 教科書に示された意見を整理した例

何をするか	時間が かからない	心がこもっているか
かんしゃじょうをわたす	○	○全員がかんしゃの気持ちを一言ずつ書く。
さつまいもを食べる	○	○みんなで協力して育てた物だから、心がこもっている。
いっしょに遊ぶ	○	○楽しいけれど、感謝の気持ちは伝わらない
プレゼントを作る	△	○一人一人が作る。
歌を歌う	○	○心をこめて歌う。 ○一生けんめいに練習する。

そして、自分たちがうまくいかなかった話し合いの例の意見を整理させることにより、意見を整理することの大切さに気付かせたい。

国語教科書では、司会の整理に関する表現や留意点が記載されている。このような表現についても、学級会での話し合いと比較させながら、その必要性について学ばせた。国語科で学習した内容は、フリップなどで教室に掲示し、後日学級会を行う際に活用した。

(2) 結果と考察

A小学校の授業実施後のアンケート調査結果は以下の通りである（表6）。

表6 アンケート調査結果

	質問項目	平均値
1	表に整理する方法を使うと話し合いは整理しやすかったですか。	4.55
2	表に整理することで、友だちの考えなどが理解しやすくなりましたか。	4.47
3	表に整理する方法を使うことで、話し合いの内容が深まりましたか。	4.61

※5件法による平均値を算出

国語科「クラスみんなで決めるには」で、表5のように意見を表に書いて整理することを学習し、実際に学級会で実践した後では、「表に整理する方法を使うと話し合いは整理しやすかったですか。」「表に整理することで、友だちの考えなどが理解しやすくなりましたか。」「表に整理する方法を使うことで、話し合いの内容が深まりましたか。」のいずれの項目においても高い数値を示した。このことは、話し合いを表で整理することの良さを子ども達が実感できたことを表している。

また、「表に整理する方法を使うと、どのような良い点がありましたか」という質問に対する自由記述でも、「表に整理すると、ものすごくわかりやすい。何が同じで何が違うのかがわかった。」「頭の中で暗記をすると、少し発言した言葉が違うふうに覚えてしまい、発言した人ともめ合いになるので、表を使うと言った意見を短くまとめたらいだけだから自分でもわかりやすいからいいと思った。」「意見をきちんと整理して話し合うことができた。どのように決めるのかをはっきりさせてから話し合いをすることができた。」など、国語科「クラスみんなで決めるには」で学んだ表に整理することが、実際の学級会の話し合いにも応用でき、話し合いがスムーズに進んだことを記述している子どもも見られるなど、話し合いにおける意識の変容が見られた。

このように、実施後のアンケート調査結果から、国語科で学んだ話し合いの意見を表で整理することは、特別活動での話し合いにおいても転用でき、話し合いを効果的に進めるために有効であることが示唆された。

2. 国語科教科書教材を活用した特別活動、学級活動

(2) 防災教育の実践指導

(1) 授業実践

ここでは、小学校学習指導要領特別活動編（2017）の学級活動の内容（2）「日常の生活や学習への適応

と自己の成長及び健康安全」のウ「心身ともに健康で安全な生活態度の形成」において位置付けられている防災教育について、国語科と特別活動とが連携した防災教育実践指導プランを提示したい（図3）。

災害場面では、状況が不確実で流動的なことから、意思決定は容易ではない（曾川，2020）。同じ状況に立たされたとしても、当事者によって、意思決定の選択が異なる。例えば、「大地震が発生し、避難している途中に、あなたは、助けを求められた。その人を助けるか？助けないか？」という場面において、当事者が若くて元気な人であれば、助ける意思決定をするだろうし、お年寄りや、子連れ、妊婦であれば、助けたくても助けられない意思決定をせざるを得ないだろう。

そこで本研究では、災害時の難しい意思決定を疑似体験するための防災ゲーム「クロスロード」（矢守ほか，2005）の話し合いに、国語科で学んだ互いの意見を整理するための表を活用することで、互いの意思決定について理解を深め、整理するための手立てとした。

「クロスロード」とは、「分かれ道」のことで、「重要な意思決定」を意味する。参加者は、カードに書かれた災害場面での設問を自らの問題として考え、

<p>(教材)</p> <p>国語科 光村図書4年下「クラスみんなで決めるには」</p> <p>特別活動 学級活動（2）「クロスロード大地震編」</p> <p>(目標)</p> <p>国語科で学んだ意見を整理するための表を活用し、発災場面での互いの意思決定について理解を深め、整理する。さらに、言葉の重なりに着目し、過去の災害時の教訓と今後の備えについて考えることができる。</p> <p>(学習過程)</p> <p>①国語教科書の「記録係が表で整理した例」をもとに表を用いて意見を整理する方法について話し合う。</p> <p>②表を用いて意見を整理する方法についてまとめる。</p> <p>③特別活動（学級活動〔2〕防災教育）において表を用いた「クロスロード」を実践する（図4）。</p> <p>④意見を整理する方法について振り返る</p>

図3 国語科と特別活動とが連携した防災教育実践指導プラン

YESまたはNOのカードを示すことによって、災害時の心理ジレンマを伴う意思決定をゲームによって、疑似体験するというものである。

「クロスロード」の特長は大きく二点、一点目は設問に対する「唯一の正解はない」ということ。二点目が「クロスロード」の問題は、阪神淡路大震災時の実話に基づき作成されたことである。「クロスロード神戸・一般編」の設問は、阪神・淡路大震災において、実際に災害対応にあたった神戸市職員へのインタビュー調査を基に作成された。矢守ほか（2005）は、膨大なインタビューデータから、多くの職員が、災害対応の様々な場面において「あちらを立てれば、こちらが立たず」といったジレンマを伴う意思決定・判断に直面していたことを見出した。この状況を予め疑似体験しておくことが、今後、発災時の意思決定場面において生かせるのではないかと考え、このジレンマを伴う意思決定・判断をゲームとして設定した。

通常、「クロスロード」ではファシリテーターが示した設問（図5）に対して、参加者一人ひとりがYESかNOのカードによって意見を示す。次になぜそのように考えたのか互いの理由を付箋に書き、それを基に交流が図られる。交流の後には、設問が作成されることになった被災地の教訓がファシリテーターから示される。

筆者もこれまで、幾度となく「クロスロード」を実践してきたが、特に中学年児童を対象にした実践において、付箋を用いた交流が深化しにくい課題を感じてきた。具体的には、YESかNOといった意見には目が向き易い反面、付箋に書かれた互いの意見の理由の相違点、類似点には目が向きにくいといった課題であ

- ・ファシリテーターが設問(図5)を示し、参加者は、YESかNOのカードのどちらかに意見を決め、カードを裏返したまま机の上に出す。
- ・「せーのオープン！」でカードの表を見せる。
- ・表を互いの意見とその考えた理由を書きながら交流を図る。その際、互いの意見の相違点、類似点に着目させるために、表(表7)の理由の欄に、話の中心や大切な言葉(キーワード)を書き取らせる。
- ・互いの理由について、理解を深めるために質問や感想を伝え合う。
- ・互いの理由から、言葉の重なりに着目させ、設問に関する被災地の教訓は何かを考える。

図4 「クロスロード」表を用いた指導展開

る。

この課題を克服するため、本研究では、国語科教材光村図書4年下「みんなで話し合って決めよう」で学んだ意見を整理するための表を用いることにした(表5)。表を用いることで、互いの意見についての理解をより深め、意見を整理し易くすることで、設問の最後に示される被災地の教訓についても、参加者が自らの力で見出すことを目指す展開とした(図4)。

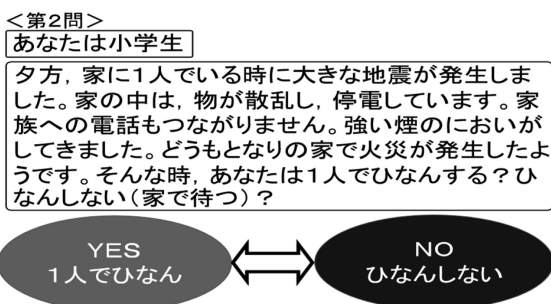


図5 実践に用いた「クロスロード」設問の一例

表7 意見を整理することで被災地の教訓は何か見出そう

発表者	意見 Yes, No	理由 ・友達が伝えたいこと、話の中心は何？ ・大切な言葉(キーワード)は？

(2) 結果と考察

実践結果を以下に示したい。

はじめに付箋を用いた場合と表を用いた場合において、互いの意見の理解度を問う設問で対応のあるt検定を実施したところ、平均差に5%水準で有意な差が認められた。このことから、表を用いた実践が、互いの意見について理解を深めることに一定程度の効果があることが示唆された(表8)。

同様に、意見整理のし易さを問う設問でt検定を実

表8 付箋、表を用いた場合の理解の深まり

「付箋を使った場合と表を使った場合では、どれくらい理解が深まったと感じましたか。」
(4年29名が回答)

	付箋	表	対応のあるt検定	判定
評定平均	3.54	4.18	t(28)=2.142	*
標準偏差	0.79	0.72		

5件法 *: $p<0.05$ **: $p<0.01$

表9 付箋、表を用いた場合の意見整理のし易さ

「付箋を使った場合と表を使った場合では、どれくらい意見が整理し易く感じましたか。」
(4年29名が回答)

	付箋	表	対応のあるt検定	判定
評定平均	3.29	4.18	t(28)=2.813	**
標準偏差	0.9	0.9		

5件法 *: $p<0.05$ **: $p<0.01$

施したところ、平均差に1%水準で有意な差が認められた。このことから、表を用いた実践が、話し合いにおける意見整理を容易にすることに、効果があることが示唆された(表9)。

最後に、意見の整理を通して、被災地の教訓を見出せそうかとの問いには、表の活用と意見整理によって、教訓を見出すことができると感じている児童の割合が高い結果が示された(表10)。

表10 アンケート調査結果(5件法)

	質問項目	平均値
1	表を使って意見を整理することができれば、問題の後に示される被災地の教訓を見出すことができそうですか。	4.07

それ以外にも、自由記述からは、「表にすることで、理由の整理が、すごくやりやすかった。」「表だと大事なことをすぐに整理できるので、私は表が良いかなあとと思います。」など特別活動での意見整理において、国語科での学びを活用する良さを挙げる記述も見られた。しかしながら、「表のやり方は、分かり易かったけれど時間がかかる。」など付箋に比べると時間がかかるということを挙げる記述もあり、今後、更なる検討が必要である。

IV. 今後の展望

本研究では、国語科「話すこと・聞くこと」領域での話し合い指導と特別活動における話し合い指導の関係を探り、授業実践プランを示しながら話し合いのプロセスの中の整理することに着目して、双方の連携の在り方を探ってきた。

調査結果でも明らかになったように、国語科の中の「整理・分類」する方法を学び、特別活動の話し合いと連携し活用させることは、話し合いを効果的に進めるためにも有効であることがわかった。

国語科と特別活動の話し合いにおいて、今回の研究では話し合いのプロセスの「整理」することに焦点を当てて研究を進めてきたが、特別活動の話し合いを合意に導くためには、その話し合いの中で意見を出し合い整理した後、合意形成を得るための司会の技能が必要となる。そこには、さらなる複雑な司会のプロセス指導や合意形成を導くため、意見の整理だけではなく分類や決定基準を決めて話し合いを行うための指導が必要である。話し合い指導においては、司会だけでは

なく、記録をとる黒板記録やノート記録に代表されるメモ指導、意見の受け止めや質問の方法等、参加者の立場に立った指導が考えられる。司会以外の役割において必要な言語能力を考えると、さらなる国語科との連携が必要であり、より合科的に指導していくことが必要であろう。

また、授業における評価設計も今後の課題である。国語科、特別活動双方が連携した各学年の評価設計を行わないと、系統的な指導は成立しない。本研究では、2校とも4学年での授業プランの設計・実施であったが、今後、他の学年にも調査対象を広げ、実践していく必要がある。

註

註1 特別活動は、大きく「学級活動（1）、学級活動（2）、学級活動（3）、児童会、生徒会活動、クラブ活動、学校行事」のように構成され、それぞれの構成が異なる集団での活動を通して、児童生徒が学校生活を送る上での基盤となる力や社会で生きて働く力を育む活動とされている。

註2 関連については、国語教科書の単元で取り扱っている話題や話し合い例、特別活動の活動内容（学級活動（1）、学級活動（2）、学級活動（3））との関係から、稿者3人で判断した。

引用・参考文献

- 杉田洋（2009）『よりよい人間関係を築く特別活動』図書文化社、p.201
- 鈴木純一郎・杉田洋他（2015）「座談会 特別活動で資質・能力を育てる」『初等教育資料No.927』東洋館出版、p.76
- 曾川剛志（2020）「リスクテイクな連続的意思決定を個別に行わせる地図活用型防災学習の開発－都市部沿岸人口密集地における図上避難訓練『DIG&クロスロードディクロ』－」『新地理』第68巻、第3号、日本地理教育学会
- 長谷浩也（2013）『小学校国語科 対話が子どもの学びを変える指導のアイデア&授業プラン』明治図書
- 長谷浩也・村松賢一（2015）「合意を目指した話し合い教材に関する研究－合意形成のプロセスとその能力の視点から－」『環太平洋大学紀要9』環太平洋大学
- 長谷浩也・重内俊介（2018）『合意形成能力を育む

- 「話し合い」指導－理論と実践－』明治図書
- 長谷浩也（2018）『話し合い』を聞き取る能力の実際と課題－小・中学生の聞き取り調査結果をもとにして－』『教育実践方法学研究』第4巻1号、日本教育実践方法学会
- 長谷浩也（2019）「合意形成のプロセスと対応した『整理』する活動に関する学習プランの開発－学習者の学びを促す『思考ツール』に着目して－」『教育実践方法学研究』第4巻2号、日本教育実践方法学会
- 長谷浩也・重内俊介・清瀬真太郎（2021）『豊富な実践事例で学ぶ小学校国語科の授業』明治図書
- 長谷浩也・重内俊介（2021）「小中学国語教科書所収『話し合い教材に関する一考察－令和2～3年度発行教科書の場合－』『環太平洋大学紀要19』環太平洋大学、令和4年1月発刊予定
- 本間洋平・古閑晶子（2014）「合意形成を図る協議の学習過程デザインに関する研究」『臨床教科教育学会誌』第14巻、第2号、臨床教科教育学会
- 村松賢一（2013）『コミュニケーション能力を育てる授業づくりの秘訣』教育報道出版社
- 文部科学省（2008）『小学校学習指導要領解説 国語編』東洋館出版
- 文部科学省（2008）『小学校学習指導要領解説 特別活動編』東洋館出版
- 文部科学省（2017）『小学校学習指導要領解説 特別活動編』東洋館出版
- 文部科学省（2017）『小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編』東洋館出版
- 文部科学省（2017）『小学校学習指導要領解説 国語編』東洋館出版
- 文部科学省（2018）『中学校学習指導要領解説 国語編』東洋館出版
- 文部科学省・国立教育政策研究所・教育課程研究センター（2016）『特別活動指導資料 楽しく豊かな学級・学校生活をつくる特別活動 小学校編』文溪堂
- 文部科学省・国立教育政策研究所・教育課程研究センター（2019）『特別活動指導資料 みんなでよりよい学級・学校生活をつくる特別活動 小学校編』文溪堂
- 矢守克也・吉川肇子・網代剛（2005）『防災ゲームで学ぶリスク・コミュニケーション クロスロードへの招待』ナカニシヤ出版